

鳥取県中山間地域の問題点

吉田 勲*・河原正彦**

平成7年6月23日受付

Some Problems for Activating Rural Communities in the Middle Part of Tottori Prefecture

Isao YOSHIDA* and Masahiko KAWAHARA**

This paper tried to clarify the characteristics of rural communities in Tottori Prefecture. The area in Tottori Prefecture is also in an exhausted condition like the areas in other prefectures. The author insisted that sustaining, and activating the village-agriculture are vitally important for protecting the natural environment. Then, some ideas activating the area are proposed.

はじめに

今更いうまでもなく、農山村人口は高齢化し、村は活力を失っている。農山村は平地の農業地帯に比べ、傾斜地が多い、零細経営、小規模分散などの不利な条件が重なり、跡継ぎもなく廃村になる集落も続出する可能性がある。不要なものならば廃れても仕方がないが、農山村はそんなに価値のないものであろうか？

1955年代、工業化が進み、都会は工場労働者を必要とし、多くの若者が都会へと去っていった。農村の若者達は日本の経済発展に寄与し、GNPを世界第2位にまで押し上げたが、その若者を生み育てた農村部は今、存亡の危機にさらされている。祖父母と父母だけの住む農村部

は、それでも、彼等が農業生産活動に従事していた時はそれほど問題とならなかったが、高齢に達し、働けなくなった今日、問題がクローズアップされてきた。

跡継ぎのいない農家の土地は放棄され、雑草等が生え、原野化していく。他方、農業をする意欲のある人に土地が移るのは歓迎すべきであるが、農業に展望が開けない今、それ程期待できない。農村は人材を都会に供給するのみで、若者の流出を防ぐことも難しい。『帰りなんいざ、田園まさにあれなんとす』と都会の若者に呼び掛けたい心境であるが、農業するにも先行きが暗い、彼等の就職先がない等の理由で故郷に若者達を呼び戻すことは容易でない。これらの問題を解決するには農村住民が努力することは勿論であるが、農村や農業のあり方について国

* 鳥取大学農学部農林総合科学科生存環境科学講座
Department of Environmental Science, Faculty of Agriculture, Tottori University

** 鳥取県農林水産部農政課
Department of Agriculture, Forestry and Fisheries, Tottori Prefectural Government

中に議論が高まり、これれに対する国全体としての合意や方向が打ち出される必要がある。そうすれば農村の進路も明確になり、そこに住む人達も自信を持って生活できるようになると思われる。私は、今まさに問題となっている中山間地域に住んでいる。本論文では現在、私の住んでいる地区で起きている問題と、その解決策を考察する。

鳥取県の中山間地域の概況

まず、鳥取県の状況¹⁾、つぎに、鳥取県中部の現状を述べる。

1 鳥取県の現況

1) 人口

鳥取県の人口(1994, 10, 1)は615,201人で1988年以来、

平均面積(A/B)を求めるとは都市的地域から山間農業地域にいくに従い、面積が増加し、中山間地域の人は県平均の2倍強の面積(=83/39)に住んで居る事が分かる。

1955年と1991年の人口を比較した場合、県全体では0.2%増加しているが、中山間地域では逆に22%も減少し、中でも山間地において34%も減少している。また、中山間地域においては集落維持が困難になりがちな集落の数が他の地域に比べて多い。

2) 年齢構成

中山間地域の年齢構成を見ると、県全体での高齢者比率(65才以上)は16.2%であるのに対し、中山間地域では19.2%と高く、中でも山間地域では20.8%と非常に高い。

3) 耕作地

第1表 鳥取県の中山間地域の概況(1991年度)

	総面積		総人口		総所帯数		
	(km ²)	A(%)	(人)	B(%)	(人)	(%)	A/B
都市的地域	360.7	10.3	312,326	50.8	100,195	55.1	0.20
平地農業地域	233.3	6.7	64,745	10.5	16,885	9.3	0.63
中間農業地域	1,206.34	34.5	162,409	26.4	43,886	24.1	1.31
山間農業地域	1,692.07	48.5	75,778	12.3	20,808	11.4	3.94
中山間地域	2,898.41	83.0	238,187	38.7	64,694	35.5	2.14

6年ぶりに増加に転じた。その原因は出生数が11年ぶりに増加したこと、県外からの転入者が転出者を上回った事にある。その詳細をみると、年少人口は108,175人(17.6%)、生産年齢人口は391,771人(63.7%)、老年人口は114,681人(18.6%)で、市町村別に見ると鳥取市、郡家町などの15市町村で増加し、逆に倉吉市、国府町など24市町村で減少した。

つぎに、1991年度の資料により中山間地域の概況を見る²⁾。鳥取県は東部の千代川、中部の天神川、西部の日野川流域の水田を除けば殆どが中山間地域に分類され、その総面積は83%を占めており、その広い面積に人口は39%しか住んでいない(第1表)。いま一人当たりの有する県

耕作地について見ると、耕作放棄地は急増しており、1990年では1985年に比べ、460ha増しの1,090haとなっている。中山間地域では1985年に比べ90%増の約630haとなっており県全体の6割を示している。1994の鳥取県の耕地面積は40,400haで、前年よりも300ha減少した。これは宅地や工場用地への転換、山間部を中心に耕作放棄などの荒廃地の増加による。その内訳は第2表に示す通りである。

4) 圃場整備率

圃場整備率は県全体で61%となっているが、特に山間地域では51%と低くなっている。いうまでもなく、中山間地域では傾斜地が多く、纏まった農地が少ないなどの、

第2表 農地の変動(1994年8月1日現在)

農地	面積	備考
水田	26,600ha (100ha減少)	水稲: 19,600ha 飼料作物: 5,020ha
畑	13,800ha (200ha減少)	豆類: 724ha 果樹園: 4,000ha その他: 11,056ha
合計	40,400ha (300ha減少)	

地形・立地条件の制約から平地に比べて生産基盤整備のコストが高くなる一方、事業費の一部を負担する中山間地の活性化域の市町村は一般に財政力が弱い。

5) 生活環境

生活環境の整備は地域定住を図っていく上で基礎的な条件であり、社会全般の生活環境水準の向上や情報化の進展に伴い農村においても都市と同様に高い生活環境水準が求められるようになった。中山間地域の下水道の普及率は11.2%と都市的地域に比べかなり低くなっている。人口集中地域DIDまでの所用時間は中間農業地域では6割、山間農業地域では9割が30分以上になっている。就業機会について見れば、中山間地域では日雇い、出稼ぎ等の不安定兼業が多い状況となっている。

6) 集落

1990年に鳥取県農林水産部が県内山間奥地集落の114集落の実態を調査したところ、廃村の可能性が特に高い集落は16集落(14%)、定住条件があり、次世代まで集落が維持できる見通しのある集落は77集落(68%)であった。

備等、中山間地域全般について言われている事が鳥取県中山間地域にも当てはまる。

2. 鳥取県中部の現況

私は鳥取県中部の倉吉市に住んでいるが、県中部の中山間地域は関金町、倉吉市、大栄町、赤碕町及び東伯町の山間部から構成されている。中部の総人口は約12万人(倉吉市：約5.2万人、東伯郡：約7万人)で、東の鳥取市(14万人)、西の米子市(13万人)の間にあり、特筆すべき産業とてなく、15才以上の第一次産業従事者1.5万人、第二次2.0万人、第三次3.1万人で、第一次産業従事者の占める割合が全体の23%を占める。これは全国平均の農家人口率の14.%に比べてかなり高い数字である。しかも農家人口は中山間地域に住んでいる。農家人口率は高いのに、現在の農業には将来の展望が無い等の理由から若者の農業離れは加速されている。私の住む60戸の村で農業を継いでいる20才代の若者はゼロである。この状態ではさらに過疎化が進と予想される。

第3表 鳥取県と都会の交通網

	東	京	大	阪
鳥 取	飛行機	JR	JR	長距離バス 飛行機
	長距離バス			
倉 吉	JR	長距離バス	JR	長距離バス 飛行機
米 子	飛行機	JR	JR	長距離バス 飛行機
	長距離バス			

従って、山間奥地の特別な事例を除き、県内の中山間地域のほとんどの農業集落には定住が期待できるものと考えられる。しかし、各地とも人口の減少や高齢化が進みつつある事から、引続き定住条件の整備が必要である。

7) 都会への交通網

都会から鳥取へ来る場合の交通手段は、飛行機、JR、長距離バスである。飛行機は米子と鳥取にあるから、東京からは飛行機を使うと便利であるが、その費用はかなりJRに比べて高い。バスは最も安い、体力がいる。大阪と鳥取間には飛行機、JR、長距離バスがあるが、長距離バスが、交通費の点で多く利用されている。飛行機は大阪空港から目的地への移動を考えるとあまり便利でなく、バスに人気が集まっている。1994年12月に智頭線が開通し、倉吉から新大阪駅へ3時間、鳥取から2時間半と短縮された。関西からは北陸よりも近くなった。

以上をまとめると、人口の過疎化、高齢化、耕作放棄地の増加、就業機会の少ない事、都会からの交通網の不

村 の 一 年

ここでは私の住んでいる村の一年間の行事について述べる。³⁾⁴⁾

1. 村の維持するもの

村が維持しなければならないものに寺が一つ、神社が二つ、そして薬師さんがある。行事には神社の夏祭り、秋祭り、薬師さんの夏の祭典がある。僅か65戸でこれだけのものを維持するには、それだけ経済的、労力的負担がかかる。その上、若者が少ない事から行事の継続が困難になっている。私が帰って来た時は村の夏・秋祭りは廃れていたが、それを復活して自分たちが主役となって楽しむことにした。即ち、夏祭りは子供や婦人会の盆踊り、カラオケ、バザーや花火大会を、秋祭りには大人の榊と、子供の樽御輿で村の家々を飲み歩いている。以来、15年間続いているが、最近では榊を担ぐ人手が減り、子供御輿だけにしようかといった話が出ている。また、こ

こでも若者不足が祟っている。

2. 村の組織

村は適当な戸数に分れた数班からなり、その班には班長がいる。班長の上に、村役である公民館長、土木、厚生、総務、体育、税金、消防の各担当役員がいる。その他に、村の神社総代、寺の総代も必要である。これら宗教的なものは村の組織とは別組織であるが、村の殆どの人が同じ寺の壇家であったり、神社の氏子である場合が多く、総会の時に神社の決算報告がされることもある。自衛消防団には一応、各家から一人出るようになっているが、年齢的な配慮がなされている。団長は完全に年齢順で任期は一年となっている。

3. 年間行事

主な年間行事を羅列すると、年始めの予算総会に始まり、自衛消防団の出初め式、冬季・夏期の球技大会、文化際、寺山と二つの神社と薬師さん春と秋の草刈りと掃除、花見、道路修理(春と秋)、春の井手さらえ、田植え前の用排水路の掃除、宮籠り、薬師さんの夏祭り、神社の夏・秋祭り、山道の草刈り、運動会、地区駅伝、忘年会、決算総会がある。これらの行事の多くは村役の指揮のもとに行われる。村役は順番制なので、これに当たると、さらに仕事が増えることになる。その上、村を代表して地区の自治協議会、さらには市の会議にでなくてはならない。私も今まで、文化部長、土木部長、自衛消防団団長をさせてもらった。勤務しながらの村役は多忙を極める。この他に開田耕作者は田植えが始まる前に、数キロ上流にある堤から開田までの用水路を1日かけて整備する。私の家にも開田に20aほど水田があったが、面倒臭くなって譲ってしまった。さらに、子供が学校に行っている時にはPTAに引っ張り出される。これだけの仕事があるから、日曜日はこれらの行事に費やされることになる。これらの行事をこなすには、住民の参加が絶対必要である。

農村の生活

1. 農業は楽しい

農業をお金の面から考えると大型農業でないと生活が成り立たないが、金銭的な事を除くと、農業は物を作る喜びを与えてくれる。従って、労働そのものは楽しい。私も時々、田に出てトラクターで田を耕耘する。小さい頃、鍬で田起こしをした経験があるが、農作業は雲泥の差がある。機械での田仕事は楽しく、年齢に関係なくできる。

2. 老人は多忙

何か施設を作った時、誰が維持管理をするかが問題となる。その時、必ず提案されるのが老人クラブに頼んだらという案である。元気な老人は現役の農業生産者であり、老人と言えども多忙である。従って、自分の事に手一杯の状態にある。その上、老人クラブは自分たちのレクリエーションは勿論、定期的な宮掃除、地区の木工クラブの世話などのボランティア活動、その上、種々の催し物への動員が市役所などからかかり、多忙を極める。人口の少ない農山村の老人クラブは組織の維持に手一杯で新規の活動はなかなか困難である。従って、新規の施設の維持管理については前もって相談しておき、それが無理ならば、他の方策を考えるのがよいと思う。

3. 中山間地の農業に理解を

昨年、決着した米の自由化でミニマムアクセスが今年度から42万トン、5年後には84万トンになると言う。日本の米価は外国の米価に比較して高いから、欧米に近い大規模農業を育成し、生産費を下げて外国の米価と等しくするという方向で農業の拡大が志向されている。鳥取県では水田農業の65%は中山間地にある。私の住んでいる所も例外でなく、大型農業はできない。私の村の農業の主体は果物、野菜であるが、どの家も幾らかの水田を耕作している。前述の考えは小農をヤメロと言うのに等しい。他方、政府は環境に優しい農業を提唱する。環境に優しいとは農業をすることにより自然への負荷を減らす事である。そういう観点からすると、大型農業は自然への負荷を高めること必死である。有機肥料を使い、減農薬の『自然にやさしい農業』とは小農のことであると思う。小農は金銭的に非効率であるからと言った観点から切り捨てるのではなく、山あいや河川上流の水田は水質保全や水源かん養には欠かせないから、それを育てる方策を必ず講じて頂きたい。森林が海の魚を養っているといった観点から漁民が森林の育成に協力をしている所もある。これと同じように、河川下流の都市住民の理解を得られないものだろうか。

鳥取県の集落の抱える問題点と活性化

鳥取県の抱えている問題を農林業について言えば、①住民は殆どが60才以上の高齢者が主体、②未整備水田で荒廃地が増えている、③木材価格の低迷から植林意欲がなく、山が荒れてきている、④猪の被害が出るようになった等であり、生活面について言えば、①集落道の整備、②農林道・水路の維持管理、③集落までの道路が狭い。③除雪が遅く、通勤時間に間に合わない、④下水道が未整備、⑤老人だけの世帯が増加、⑥集落内に就労の場が

ない。⑦公園・広場の整備, ⑧バス路線の整備, ⑨集会所の設置などがあげられる。田舎は人口過疎であるので, 住民はそれだけ自然を多く享受している。活性化にあたっては, 自分達だけでなく, 都会の人にも楽しんでもらう事が大切である。都会の人に来てもらうにはアクセス道路の整備, 下水道の整備, 宿泊施設の整備, 地方の文化財の発掘も必要である。また, 農村には土地が余っているのであるから, 安い別荘地の開発などを, 従来の不動産屋ではなく, 農協とか公設の機関により廉価で斡旋することが必要と考える。

現在, 安全野菜, 安全な飲料水, そして自然の中手の生活への関心が高まっている。この機運を活用して, 都市と農村との交流を深めるのも良い。これには都市と農村とが友好的な姉妹関係を結び都会の人と田舎の人がお互いに知り合いになり, 都会の良いところ, 田舎の良いところをお互いに享受するように勤める。これには安全野菜を仲介とした婦人会同志の交流, 町と村の子供の交流, 農作業体験を通じて農業への理解を高める事, 安全な生産物の販売, 安全食品の産地直送食糧等色々と考えられる。これらの政策を行うにあたって, 次のことが先ず先決ではなかろうか。

1. 若きリーダーの育成

村の活性化にはリーダーの育成が大切である。昔, 小・中学校の運動会では集落対抗リレーが最後のイベントで, 父兄, 生徒が一体になって声援を送っていた。しかし, 現在, この種目はプログラムから消えてしまった。その理由は言うまでもなく, 生徒数が少なくてリレーのメンバーが揃わないからである。この事から推測されるように, 農村に住む父兄も少ない。従って, 村を切り盛りするのに, 人数の絶対数が足りない。村役は任期が一年であるから, 前任者のやった事を無難に消化して終わることが多い。しかし, 村の長期的な発展という観点から考えると, これがネックになる。せめて集落の館長位は長期的にやって下さる人がいれば, 村も発展するのだが, 現実にはそうはいかない。逆に, 強力なリーダーのいる集落は発展しているように思われる。

2. 村祭りの復活

昔, どの村にも村祭りがあり, 祭りの日は村によって異なり, 祭りの季節にでもなると, 日替わりで村祭りの梯子を行っていた。しかし, 現在では, 若者が田舎にいなかった事, 祭りの日が同じになった事, 祭りへの関心が低くなった事, 現在の農村は混住化が進み, 必ずしも農業を中心とした生活者ばかりでなくなってから村祭りは廃れる一途である。そこで, 村祭りを復活し, 自分

たちが主役になって楽しむと共にイベント化して町の人にも一緒に御輿を担いでもらい, かつ酒を飲みながら村を練り歩き, 村の住人と町と村の交流を深めるのも一つの手法であると思う。

3. 自然を活用した保養施設整備⁹⁾

中山間地は自然的資源に恵まれてはいるが, 従来あった森林, 灌漑用の溜め池, 湖は往々にして農業関係者だけの閉鎖的な物であった。これからは農業関係者以外の人にも開放する。特に都会の人に来て楽しんでもらう事を心掛けるべきである。それには, 先ず, 湖沼の湖畔を整備して, 水に親しむとか, ボートを浮かべて遊んだり, 釣りを楽しめるようにする。また, 滝や森林は森林浴, キャンプ, 散歩, ハイキングなどによる休養の場となるように整備する。中山間地帯に豊富に存在する谷川, 滝などを整備して, せせらぎを聞きながら水に親しめるように水環境を整備する。

農協かその他の団体が遊休農地を獲得し, 市民農園, 耕作希望者への農地斡旋をする。廃屋・校舎らの施設を開放し, 泊まり込んで自然に親しむ生活の実践の場として提供する。

倉吉地方には旧国鉄の廃線跡地, トンネルなどが放置されたままになっているのを散見するが, これらの活用をも図るべきである。例えば, トンネルは年中温度が一定で冬暖夏涼の空間である。この地を倉庫, 集会場, 画廊等に利用できないか。

また, 中山間地には落差の取れる河川があるので, ミニ水力発電所などを作り, 村の電気を発電し, 余った電気は売ることも考えるべきである。

4. 史跡や伝承文化の発掘と新しい村作り

地方には, 古くから伝わる文化遺産や歴史的史跡がある。そういった物があれば関連整備して, 自分達だけでなく, 都会の人にも楽しんでもらう。

5. 安全食品の提供

安全な食品栽培, 安全な加工食品, 村起こしに繋がる食品加工, 農村と都市の婦人の交流会などを通して, あらゆる活性化の手段を試す。

6. 行政は農村へ

近年, 農村の施策も急速に変化し, 次から次へと新規の政策が発案・実施されている。現場の専門官がその勉強に忙しい位だから, 農村住民にはなおさら農村政策がどうなっているのか分からない。従来, 出来なかったことが, かなり自由にできるようになっているのに, 住民はそれを知らない。この間のギャップを埋めるには, 行政側が積極的に住民へそれを知らせる努力をすべきではな

いか。また、住民からでた要望の中に、現在の事業になじまない物が有ったとしても、行政はそれを跳ねつけるのではなく、上位の官庁に積極的に相談し、実現へ向けての努力が欲しい。従来の方法に拘泥せず新しい観点から新事業を起こしてでも実現して欲しい。直接、農村住民と接触する機会が多いと思われる市町村の担当官には、この点は特に要望しておきたい。

7. 都市と農村の交流

安全食品、産地直送食糧農作業体験学習、農村で休暇、市民農園などの政策を通じて都市と農村の交流を行い、地道でも長く続く交流を行ってほしい。

む す び

日本の農村は有史以来の一番の変革期にきているのではないか。農村と都市の生活のスタイルの差は無くなって来ている。また、農村は農業生産者だけではなく、種々の職業人から構成され、これらの人々からの要求は農業生産基盤の整備的な物から生活環境整備的な物へと変わって来ている。経済的観点からすると、農業の国民総生産に占める割合は1.6% (1992) と低い故に農業は切り捨てられそうになっている。村から若者が去り、住民年齢は高齢化してきている。このままでは村は廃れる。そうなれば、自然の環境破壊が一層進むことになる。これを防ぐには農村を若者の定住する魅力ある村にすることである。それには村が持っている自然的環境を十分に活用し、その上に、生活環境を整備し、都会の人にとっても魅力ある農村につくりかえ、そして村と町との交流を深めることが大切である。村の自然を都会の人に楽しんでもらえるようにできるかどうか、中山間地の活性化の鍵になるのではないのだろうか。

繰り返しになるが、農業に展望が開けない現状では農村に住んでいて農業をしている人の心が荒れているのが心配な今日この頃である。行政も、農村は環境保全の主役であるとの立場に立ち、そこに人がいることは自然を

管理していることに思いをはせ、工業のような生産効率だけに目を奪われることもなく、農業は、今まで金に換算することを憚っていた水、空気、緑を提供している所であることを思い、農業、農村を守ることが自然生態系にあった最適の環境保全法であるとの観点から積極的に農山村の活性化に取り組まれることを切に望むものである。

農村は都会よりも屋敷が広く、緑に囲まれている。その上、下水道が完備すれば都会以上の生活環境になる。いまさら、ヨーロッパの例を出すまでもないが、彼の地では農村の中に都市があり、農村と都会の交流は簡単になされている。日本では逆で、大都市の回りに農地があり、都会から農地へ行くには不便である。しかし、鳥取県について言えば、総人口が約61万5千人と非常に少なく、農村の中に市町村があるといった状態であり、こういった観点から見るとヨーロッパの都市環境にあるといえる。従って、この地では農村地帯を中心とした町作りが基本でないかと思う。新しい施設を作る時、多大な経費をかけて小さい物を市街地に作るよりも、土地の余っている農村部に施設を作って欲しい。さらに近畿の大都市圏との市町村単位の交流計画に基づいた活性化計画も求められる。狭い範囲であれ、広域的であれ、都市と農村部の交流を目指した農村の活性化が理想である。

参考文献

- 1) 中国四国農政局建設部開発課：中山間地域の現状と今後の課題、平成5年11月 (1994)
- 2) 津野幸人等：中山間地域新興調査報告、中国地方中山間地域における農林業経営の新展開の可能性とその条件並びに技術的素材とその考察 中山間地振興調査研究会鳥取大学研究グループ (1993)
- 3) 吉田勲：ぬのこ谷の虹、農業土木、535 30-31 (1994)
- 4) 吉田勲：日日は好村、農業土木 545 24-25 (1995)